

## ★ 麦類 赤かび病 情報

出穂時期が早まりそうです

防除適期を逃さないようにしてください

麦類の赤かび病(写真1)に対する1回目の防除適期(赤かび病に感染するリスクが高い時期)は、二条大麦では葇殻の抽出期(写真2左、出穂期の14～16日後)、小麦では開花を始めた時期(出穂期の4～5日後)から開花期(写真2右)とされ、2回目の防除適期は1回目の1週間後とされています。特に、この時期に赤かび病菌の子のう胞子の形成と飛散を促す気象条件(日最高気温が15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上か降雨直後)が重なると、赤かび病に感染するリスクが高くなります(図1)ので、注意が必要です。

農林センター作物部の調査(2月20日)では、「農林61号(小麦)」の生育は平年よりも早く、「サチホゴールデン(大麦)」も昨年同様、早い生育を示しており、両種とも出穂期は早まる見込みです(表1)。防除適期を逃さないようにしてください(表2、3)。



写真1 赤かび病(矢印) 小麦

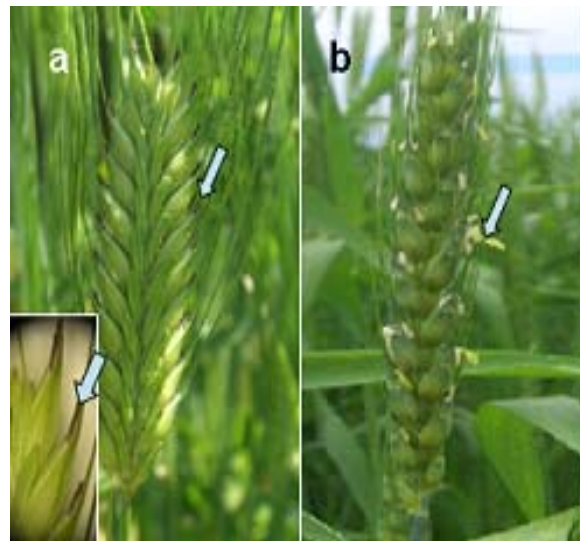


写真2 麦類の防除適期(1回目)

a: 二条大麦の葇殻の抽出(矢印、左下:拡大写真)  
b: 小麦の開花(矢印)

表1 麦類の作況調査(2月)\*

麦の種類・品種	調査年	調査項目	
		草丈 cm	出穂日 月日
農林61号	平成29年	24.7	-
	平成28年	24.4	4.13.
	平年**	20.7	4.25.
サチホゴールデン	平成29年	23.6	-
	平成28年	23.0	3.28.
	平均***	-	4.10.

\*11月10日播種、農林センターほ場

\*\*平成3～9、15～17、19～21、25～28年の平均値

\*\*\*平成23～25年の平均値

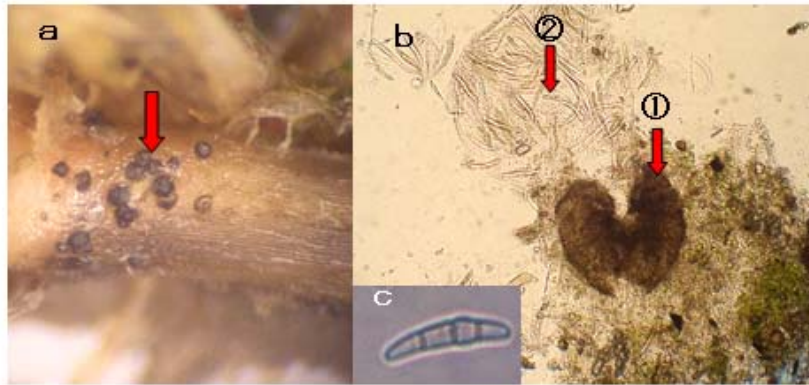


写真3 麦類赤かび病菌の子のう殻と子のう胞子

- a: イネ科植物の残渣上に形成された子のう殻(矢印)
- b: 子のう殻が破れ(矢印①)、噴出した子のうと子のう胞子(矢印②)
- c: 孢子採取器内のスライドグラス上に採取された子のう胞子

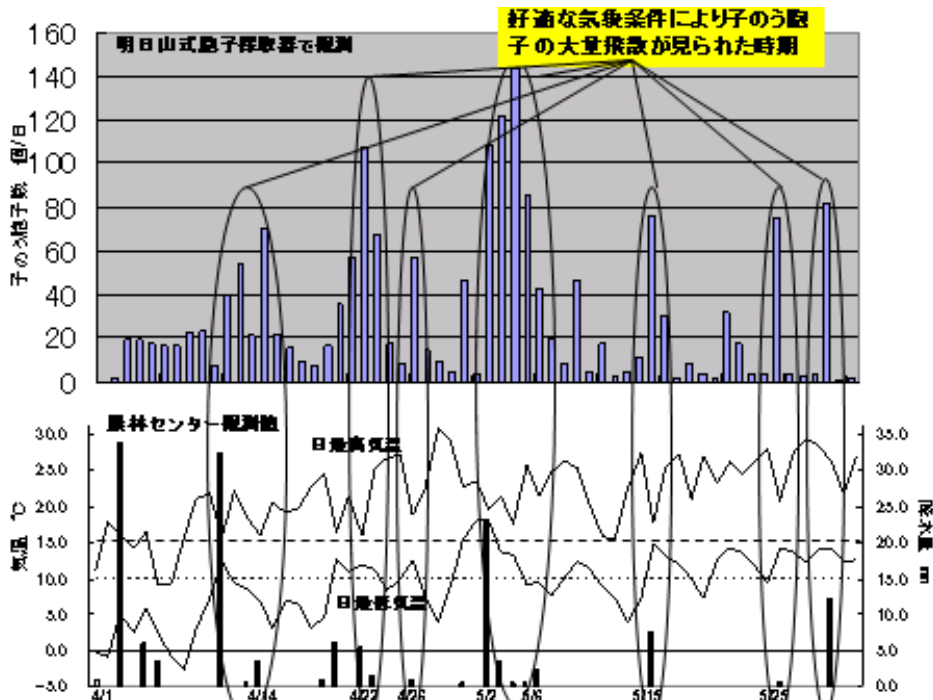


図1 麦類赤かび病菌子のう胞子の飛散数と気象条件(H24年、農林センター麦ほ場)

### 防除上の注意事項

- (1) 出穂期、穂揃い期及び開花期は品種、は種時期、ほ場の場所及び栽培条件等で異なるため、出穂や開花状況をよく観察した上で防除適期を判断してください。
- (2) ほ場の水はけが悪いと生育・出穂が不揃いとなり、防除効果が低下しやすいので、排水対策はしっかりと実施しましょう。

表2 「小麦」で赤かび病に登録のある主な薬剤(平成29年3月17日現在の登録内容\*\*)

FRAC コード*	農薬名	希釈倍率	使用液量	使用時期	使用回数	使用方法	総使用回数	備考
1	トップジンM水和剤	250倍	25L/10a	収穫14日前まで	3回以内(出穂期以降は2回以内)	散布	4回以内(種子への処理は1回以内、散布及び無人ヘリ散布は合計3回以内、出穂期以降は2回以内)	
		1000～1500倍	60～150L/10a					
	トップジンMソル	1000～1500倍	60～150L/10a	収穫14日前まで	無人ヘリ散布			
		8倍	0.8L/10a					
	ベンレート水和剤	2000～3000倍	60～150L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	4回以内(種子への処理は1回以内、は種後は3回以内)	
1、M7	ペフトップジンフロアブル	800～1000倍	60～180L/10a	収穫14日前まで	3回以内(出穂期以降は1回以内)	散布	(イミノクタジン酢酸塩)	
		250倍	25L/10a				(チオファネートメチル)	
1、10	ブライア水和剤	1000～1500倍	60～150L/10a	収穫21日前まで	2回以内	散布	(ジエトフェンカルブ) 2回以内 (ベノミル) 4回以内(種子への処理は1回以内、は種後は3回以内)	
3	トリフミン水和剤	1000～2000倍	60～150L/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	3回以内(種子粉衣は1回以内)	
	トリフミン乳剤	1000倍		収穫3日前まで				
	チルト乳剤25	1000～2000倍	60～150L/10a	収穫3日前まで	3回以内	散布	5回以内(根雪前は2回以内、春期以降は3回以内)	
		8倍	0.8L/10a	収穫7日前まで				
	シルバキュアフロアブル	2000倍	60～150L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	3回以内(根雪前は1回以内、融雪後は2回以内)	
		500倍	25L/10a					
		16倍	0.8L/10a					
	リペロ水和剤	2000倍	60～150L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内	麦類に登録
	ワークアップフロアブル リペロフロアブル	2000倍	60～150L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内	麦類(大麦を除く)に登録
500倍		25L/10a						
10～16倍		0.8L/10a						
無人ヘリ散布								
ワークアップ乳剤	1000～1500倍	100～150L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内	麦類に登録	
	1000倍	100L/10a						
	5～8倍	0.8L/10a						
11	ストロビーフロアブル	2000～3000倍	60～150L/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	3回以内	
		500倍	25L/10a					
11、3	ナティーボフロアブル	1000倍	60～150L/10a	収穫21日前まで	2回以内	散布	(テブコナゾール) 3回以内(根雪前は1回以内、融雪後は2回以内) (トリフロキシストロビン) 3回以内(根雪前は1回以内、融雪後は2回以内)	
M1	サンヨール	400倍	60～150L/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	3回以内	
M2	イオウフロアブル	400～800倍	—	—	—	散布	—	麦類に登録
	クムラス	300～500倍						
	サルファーゾール	400倍						
	石灰硫黄合剤	50～60倍						
M7	ベルコート水和剤	1000～2000倍	60～180L/10a	収穫21日前まで	3回以内(出穂期以降は1回以内)	散布	4回以内(種子への処理は1回以内、散布及び無人ヘリ散布は合計3回以内、出穂期以降は1回以内)	
	ペフラン液剤12.5	500～1000倍	60～150L/10a	収穫14日前まで				
	ペフラン液剤25	1000～2000倍						

\*殺菌剤コード。殺菌剤の有効成分を作用点と作用機構から分類した番号や記号のことで、本コードが異なる薬剤を使用することにより、同一系統の薬剤の混用を防ぐことができる。  
 \*\*農薬の使用に当たっては、最新の使用方法や注意事項を必ず確認すること。また、各薬剤の使用回数を守るとともに、有効成分の総使用回数についても注意すること。

表3 「大麦」で赤かび病に登録のある主な薬剤(平成29年3月17日現在の登録内容\*\*)

FRAC コード*	農薬名	希釈倍率	使用液量	使用時期	使用回数	使用方法	総使用回数	備考
1	トップジンM水和剤	1000～1500倍	60～150L/10a	収穫30日前まで	3回以内(出穂期以降は1回以内)	散布	3回以内(種子への処理は1回以内、出穂期以降は1回以内)	麦類(小麦を除く)に登録
	トップジンMゾル	1500倍		収穫14日前まで		無人ヘリ散布		
3	トリフミン水和剤	1000～2000倍	60～150L/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	3回以内(種子粉衣は1回以内)	麦類に登録
		8倍				0.8L/10a		
	チルト乳剤25	1000～2000倍	60～150L/10a	収穫21日前まで	1回	散布	1回	
		8倍				0.8L/10a		
	シルバキュアフロアブル	2000倍	60～150L/10a	収穫14日前まで	2回以内	散布	2回以内	
		16倍				0.8L/10a		
	リベロ水和剤	2000倍	60～150L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内	麦類に登録
	ワークアップフロアブル リベロフロアブル	2000倍	60～150L/10a	収穫7日前まで	3回以内	散布	3回以内	
		500倍	25L/10a			無人ヘリ散布		
		10～16倍	0.8L/10a			散布		
1000～1500倍		100～150L/10a	無人ヘリ散布					
ワークアップ乳剤	1000倍	100L/10a	5～8倍	0.8L/10a	散布	3回以内	麦類に登録	
ワークアップS乳剤	1000倍	100L/10a			無人ヘリ散布			
11	ストロビーフロアブル	2000～3000倍	60～150L/10a	収穫14日前まで	3回以内	散布	3回以内	麦類(小麦を除く)に登録
M2	イオウフロアブル	400～800倍	-	-	-	散布	-	麦類に登録
	クムラス	300～500倍						
	サルファーゾル	400倍						
	石灰硫黄合剤	50～60倍						

\*殺菌剤コード。殺菌剤の有効成分を作用点と作用機構から分類した番号や記号のことで、本コードが異なる薬剤を使用することにより、同一系統の薬剤の連用を防ぐことができる。

\*\*農薬の使用に当たっては、最新の使用方法や注意事項を必ず確認すること。また、各薬剤の使用回数を守るとともに、有効成分の総使用回数についても注意すること。